

「第2回とやま未来創造県民会議」での主な意見

【人口ビジョン】

- ・自然増減については、かなり厳しい条件設定であるが、国の将来人口推計とのバランスや、若い世代の転出超過を早期に改善させるという目標を掲げる意味で、ケースC（2060年人口が約81万人）が妥当ではないか。
- ・（将来）人口が下げ止まったところが「適正人口」だとした場合、社人研推計による約65万人の場合でも、ケースCの約81万人の場合でも、県民の幸せをどのように構築するかということを考える必要がある。
- ・人口ビジョンでは、Dのパターン（2060年人口が約87万人）以外はすべて全国の減少率よりも高い減少率となっている。このことは、地域間競争に負けてしまうことを前提とした設定と思えるので、もっと「地域間競争に負けない」という意思表示をすべき。
- ・人口ビジョンがまず先にあって、そのために人口を増やすための施策があることに女性として違和感を覚える。富山の魅力を増やすための施策があって、その結果として、ここで暮らしたい、ここに戻ってきたいと思う人が増えればよいと思う。

【結婚・出産・子育ての願いが叶う環境整備】

- ・出生率を増やすには、短時間勤務制度の導入、育休・産休の取得促進、保育施設の充実の3つが重要。富山県は、家族全体で子どもを育てる環境が整い、待機児童も少ないが、育休・産休の取得促進について、もっと取り組む必要がある。
- ・医療福祉関係の職場では、短時間労働が難しく、労働生産性も低い。こうした領域で安心して子育てをできる環境を整えることも重要。
- ・子育て支援・少子化対策について、富山県らしさを出すキャッチフレーズが必要ではないか。フランスでは、女性の社会復帰を進めることで少子化対策に成功した。共働き率がトップクラスの富山県でも、「働

き続けることのできる富山」など富山スタイルの取組みを進めることで、富山の良さが伸ばされるのではないか。

- ・子育て支援策の中に、「子育て家庭の経済的負担の軽減」とあるが、若い人たちは、「精神的なサポート」があるかどうかというところも心配している。「精神的なサポート」についても目に見える形で加えていただきたい。

【雇用の創出、産業の振興、県外からの移住促進】

- ・今後20年くらいで人の働き方は完全に変わると思う。その時に新しい働き方をどのように形作るのかを想定しなければならない。
- ・富山の強みである「薬」について、生薬栽培と農業の振興のための休耕田の活用を結びつけ、生産と原料作り、そして薬にしていく流れをワンストップ化し、さらに、カプセルなど製薬関連産業の振興にも結びつけることができるのではないか。
- ・県立大では全国で初めて医薬品工学科を設置するが、ほかにもロボットの分野などユニークな学科を作れば県外からも学生が来て、県内での就職にも結びつくのではないか。
- ・これからの医薬品産業は、容器と医薬品を一体で開発していかなければならない。そうした意味で、県立大における医薬品工学科の設置は、本県の産業振興につながると思う。
- ・観光をビジネスとして考えた場合、どうやって外貨を獲得し、稼ぐかを考えることが重要。富山県では、人材育成として「とやま観光未来創造塾」に取り組んでいるが、「稼ぐ力」を考えた場合に、その組織と仕組みを検討する必要がある。総合的な観光マーケティングを行ったり、周遊券や着地型のオプションツアーの販売などのサービスを行う組織が必要ではないか。
- ・MICEを誘致するにはレベルの高い宿泊施設が必要。ホテルが増えてサービスが向上すれば、客が増えるとともに、若い人の雇用も増えることから、県外に流出した人材の引き戻しや県外出身者の雇用にも

つながる。

- ・新幹線開業で東京と富山が2時間で結ばれ、東京からの集客についてもう少し踏み込むべき。外国人観光客はジャパンレールパス（JR全線で使用可能な外国人観光客向け切符）を使い、コストをかけず2時間で富山と東京を行き来することが可能。新幹線で2時間で行き来できることは観光戦略として非常に大きな価値がある。東京に来た観光客に富山に来てもらうという戦略を打ち出してもいいのではないか。
- ・観光人材が必要。観光客が増えても、観光を担う若者が富山にいないといけない。基本目標1～4の中の雇用と観光と人づくりとが密接に関係しているという視点が必要。
- ・観光の先に移住や定住がある。富山県の豊富な観光資源をさらに情報発信していくと同時に、北陸地域の広域的観光の定着化も必要で、様々な大規模キャンペーンを続けることが定着化を図ることにつながる。
- ・ものづくりの盛んな富山の地方の特徴を活かし、産業観光にもっと取り組むべき。
- ・少子高齢化と人口減少社会の裏には、産業界の衰退という課題がある。どの産業が衰退するか、といったことははっきり出して、議論した方が現実味を帯びる。

【女性・高齢者など多様な人材確保と労働生産性の向上】

- ・生産現場ではオート化が進んでいる。今の業界では、「人と一緒に働けるロボット」が合言葉になっており、将来的には産業界だけでなくサービス業などでもロボットが活躍する時代が来ると思う。
- ・県内の一部の旅館では、人が不足して接客できないため、空室なのにインターネット上では満室になっていることがある。県全体で考えた場合に、ロボット化で労働力を補える部分と、そうでない部分をマクロ的に考えてみることはできないか。
- ・人材の育成について、県外のある大学では、知識、事実の習得のほか、

自立心とかコミュニケーション力の向上、農業体験などの人間力を高めるための課外授業をやって新しい人材の養成に成功している。(ロボット化できない部分の)人材(技術者)の養成についても論点にしたらいいのではないか。

【地域の基盤強化・魅力向上】

- ・ 経済的な投資に対して社会的な投資を行うというアイデアを盛り込んでほしい。インフラだけでなく、人と人の関係を作れるような投資をやらないと移住者はコミュニティに入り込めない。
- ・ 若い女性が東京へ行って帰ってこない理由として、富山県には(若者にとって)心がときめくような魅力が少ないのではないか。住み良く、かつ賑やかな町であれば、女性も住むのではないか。
- ・ 高齢者が増加し、高齢者の交通死亡事故も増加している。公共交通機関を充実させなければいけない。病院など、かつては市内にあったものが郊外にありマイカーかバスでしか行けないようになっている。公共交通やまちづくりについて県や市と一緒に検討すべき。

【その他】

- ・ 富山県の「良さ」「強み」を最大限活かすという方向性はとても良いと思う。(ストレングスモデル)
- ・ 人口が減少する中で、「負担を分かち合う」ことを考えなければならない。人口が減っても、それに勝る魅力や活力にあふれる街をつくっていくことが重要。
- ・ 総合戦略の中で、商品を作って外に売っていくというマーケティングや、稼いだお金を県内で回して景気を良くする、税収を上げるというキャッシュフローについても明確に打ち出すことが必要ではないか。
- ・ 人口と食糧の問題とエネルギーの問題の視点が抜けている。国内でも食糧、エネルギーは自給していくべきだという動きになっているにも関わらず、(国や地方の)総合戦略の中でこの2つの柱が抜けている。

- ・ 富山県の将来を議論するうえで、教育や経済など富山県ならではのデータベースを作る必要があるのではないか。富山県と他地域を比較した客観的データがあってもよいと思う。
- ・ (総合戦略は) 富山県の良いところをさらに伸ばすという視点や、それによってできる富山のアイデンティティがもっと語られ、アクションプログラムにつながるようなものであって欲しい。どのように的を絞るのかという点も検討すべき。
- ・ 富山県そのものがコンパクトな県なので、これを強く打ち出していったらいい。あらゆるものが集約できる可能性があり、今まで県や市町村がバラバラでやっていたこと(箱モノなど)を協力して集約すれば魅力が増す。
- ・ 素案に掲げられた各施策をどう結び付けていくか、ワンストップ化できないかを考え、富山の強みを活かしたものになればいい。